

12

December
2024

[月刊]キリスト教書評誌

本の

HON-NO-HIROBA

ひろば

ISSN 0286-7001

一般財団法人キリスト教文書センター

1957年7月17日第三種郵便物認可

2024年12月1日発行(毎月一回1日発行)第804号

出会い・本・人

「出会い、本、動物!？」 鬼頭葉子

特集シリーズこの三冊!

信仰の旅を「観光旅行」で終わらせないためのこの三冊!

MARCO

本・批評と紹介

N・T・ライト著/標 珠実訳/島先克臣 監修

わたしの聖書物語 中村佐知

ヘンリ・ナウエン著/渡辺順子訳 平和の種をまく 志村 真

小高夏期自由大学事務局 編著

心折れる日を越え、明日を呼び寄せる 荒川朋子

大嶋重徳著 若者と生きる教会・若者に届く説教 吉澤慎也

水垣 清著/金城学院大学キリスト教文化研究所 監修

岐阜キリスト教史 山口陽一

ヘンリー・ナウエン著/リチャード・ロール序/ブラウネルのぞみ訳

イエスさまについていこう 徳田 信

川上直哉著 私の救い、私たちの希望 片柳弘史

金子晴勇著 キリスト教思想史の例話集Ⅰ 佐藤貴史

◆ 既刊案内

◆ 書店案内

聖書
ぬりえ

かみさまと 金斗鉦 いつもいっしょ

金斗鉦
イラスト



2024年11月11日刊行予定

子どもも大人も楽しめる聖書ぬりえ。「天地の創造」「受胎告知」など旧約・新約における22の名場面のぬりえを収録。かわいいイラストで描かれており、ぬりえをしながら、聖書のおはなしに親しめます。

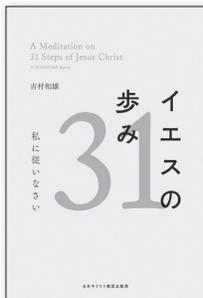
◆B5判 並製・48頁・定価1,100円



イエスの 歩み31 私に従いなさい

吉村和雄

2024年11月8日刊行予定



◆四六判 並製・144頁・定価1760円
降誕から復活まで、イエスの生涯を31日でたどる。1日ごとに聖書の言葉、短い解説と祈りを収録。クリスマスプレゼントにも最適！

好評発売中 『聖書の祈り31—主よ、祈りを教えてください』 大島力/川崎公平 定価1,650円

70歳からの キリスト教

聖書でたどる人生の旅

大澤秀夫

2024年11月22日刊行予定



◆四六判 並製・128頁・定価1540円
年を重ねて向き合う問題が移り変わるとともに、聖書は新しい気付きを与えてくれる。聖書の物語から高齢者の生き方のヒントを示す書。

好評発売中 『55歳からのキリスト教入門—イエスと歩く道』 小島誠志 定価1,320円



出会い、本、動物!?

鬼頭葉子

近年、動物とは何か、動物にどのように配慮するのかを、哲学やキリスト教思想の視点から考える試みをしている。子ども頃から飼える限りのあらゆる動物に囲まれ、愛読書は「ドリトル先生物語」だった。動物にかかわる仕事がしたいと思っていたが、その夢はかなわなかった。今は形は変われど、動物というテーマに日々頭を悩ませている。きっかけとなったのは、神学者スタンリー・ハワーワスやジョン・B・カブJr.などが寄稿した論文集『動物のための福音か? (Good News for Animals?)』を読んだことだったと記憶している。救いの出来事は、人間のみならず、動物を含めた被造物にも及ぶという考え方は、当時の私には新鮮な驚きだった。

本との出会いとともに、実際の動物との出会いもあった。自宅には、一代目の元外猫が逝った後、思わぬ形でやってきた二匹の姉妹と思しき元外猫が暮らしている。急に冷え込んできた秋の日、外で暮らす猫たちの世話をしている顔見知りのボラン

ティアの方と、スーパーマーケットで遭遇した。よく見かけていた姉妹猫のうち一匹が病気になる、保護していると言う。行き場所がなく、快方に向かえば元の居場所に戻すしかない状況だった。思わず、「リリリスしないでください。うちで面倒を見ます」と言った結果、彼女らが家にやってくる運びとなったのだ。二匹とも十歳以上、猫エイズ(FIV)陽性で、日和見感染などへの対応が必要となった。思った以上に費用もかさむ。「ルカによる福音書」で善いサムリア人が言う、「この人を介抱してください。費用がもつとかかったら、帰りがけに払います。」との言葉が、いかに法外であるかを悟った。動物の隣人となる道はけわしい。

最近、一匹は悪性腫瘍の診断を受けた。懸命に生きる命と向き合い、多くのことを教えられ、共に過ごせる残り少ない日々を思う毎日である。



▼シリーズ この三冊！

信仰の旅を「観光旅行」で終わらせないためのこの三冊！

M A R R O

(まろ…行政書士、上馬キリスト教会 Twitter部「中の人」)

主の御名をあがめます。

M A R R Oです。

人生はよく旅にたとえられます。そして僕たちクリスチャンが歩む信仰生活もまた旅にたとえられます。特に日本で暮らす日本人クリスチャンにとってこの旅は、それまで慣れ親しんだ慣習を離れて異国を一人旅するような難しさと同様さがあります。一方で、旅というのは往々にして観光旅行で終わってしまうものでもあります。もちろん、初めから観

光目的の旅であればそれで構わないのですけれど、観光旅行をしただけでは、本当にその土地のことを知ることはできませんし、自分自身が得られる経験もある程度で頭打ちになります。まして、信仰の旅はけっして観光旅行で終わっていないものではありません。

旅と言えば、僕は20年ほど前にアメリカのボストンで2年半、音楽を学ぶために留学生活を送ったのですが、今思えばこの旅は今もなお続いている信仰生活の

「先に見せられた縮図」であったなと思います。それまで海外旅行もしたことのない、また一人暮らしもしたことのない僕にとってそれは「初めての海外で初めての一人暮らし」という、二重の「初めて」が重なったエキサイティングな体験でした。そこでまず役に立ったのは観光旅行用のボストンのガイドブックでした。それを見ればボストンの街の概要や気候、主な建物やそこへの行き方などが書いてありますから、まずはこの本に首っ引きで旅を始めることになったわけです。

アリスター・マクグラス『信仰の旅路』

信仰の旅にも、そんなガイドブックがあります。そういった本は他にもたくさん出版されているでしょうが、僕が信仰生活の初めの頃に読んで、クリスチャンとして生きる人生の概観を得たのはアリスター・マクグラスの『信仰の旅路』

(いのちのこぼ社)です。この本はまさに「旅路」をテーマとしていて、これから歩む信仰の道が「旅」であることを、ページをめくる度に実感することができま

す。この旅の目的を知ることでもできますし、そこへの道筋も知ることができま

す。その上、アンセルムスやルター、ウエスレー、ボンヘッファーといった、信仰の旅の上での「ランドマーク」も多々紹介されていますから、右も左もわからずにこの「信仰」という街に飛び込んだとしても、大きく道に迷うこともなく進むことができます。そしてこれから始まる、あるいはすでに始まっている旅が、けっして観光旅行ではなく、明確な目的のある旅なのだということを、大きなワクワク感と共に実感できることでしよう。この本がもたらしてくれるワクワク感は決して派手な分かりやすいそれではありませんけれど、腹の底からジワジワと湧き出すようなこのワクワク感

が僕はとても好きですし、それは地味ではありつつも一度湧き出し始めたら二度と止まることのない、まさに「尽きることのない泉」のようなワクワク感です。

大嶋重徳『自由への指針』

さて、ボストンでの旅が半年から1年ほどを過ぎると僕もだんだんその旅に慣れてきまして、するとガイドブックには書かれていない、街のさまざまな表情に気づくようになります。路地裏にある有名ではないけれど安くておいしいレストランとか、冬になると街路樹の枝の間からごくごく小さなダイヤモンドダストを一瞬だけ見られることがあるとか、コインランドリーやマーケットで顔見知りのおばさんができて、なんとなく「友だち」みたいになったりだとか。「この街って、丁寧に観察してみるとこんなに魅力的でダイナミックだったのか」と気付かされるようになってきます。一方

で「この道は危ないから入ってはいけない」とか「この店は油断するとほったくられるぞ」とか、そういった危険や落とし穴についての知恵もついてきます。旅というのはこの段階に至ってようやく「観光旅行」を脱して、真の経験になってくるのかと思います。

信仰の旅においてもこれは同じことで、いつまでも「ガイドブック」に書いてある概観やおすすすめスポットばかりを見ていても、経験が深まりません。そんな段階に至った旅におすすすめしたいのが大嶋重徳さんの『自由への指針』(教文館)です。これはノンクリスチャンの方にも有名なモーセの十戒について、一つひとつの戒めを丁寧に、しかもわかりやすく、しかもしかも現代的な感覚で、解説してくれる本です。これを読んだら「十戒だけでなくこんなにも魅力的でダイナミックな世界が広がっているのか!」とガイド

ブックにはけっして記されない「街の魅力」に気づけることうけあいです。そして一方で、この「街」で暮らす上で陥りがちな落とし穴についての警鐘も記されています。信仰の旅というのはその道を進むにつれ、様々な落とし穴があるものです。たとえば聖書のある一節だけを盲信してしまったり、反対に耳に痛い箇所を無視してしまったり。聖書を読み、それに基づいた生活を送るためには、実際の旅と同じように一種のバランス感覚が必要なものです。楽しい体験だけでなく、ちよつと苦い体験もあつて初めて、その旅は意味あるものになります。そういうバランス感覚が、読みやすさわかりやすさと共存しているこの本は、きつと皆さんの信仰の旅を豊かにしてくれるはず

です。

十戒の他にもそんな『街』の細やかな景色を味わいたいという方には林牧人さ

んの『主の祈り』（日本キリスト教団出版局）や、ティモシー・ケラーさんの『放蕩する神』（いのちのことは社）もおすすめです。主の祈りだけで、「放蕩息子」のたとえ話だけで、これほどまでに世界と生活が深まるのかと、感嘆させられます。

ブレイズ・パスカル『パンセ』

さて、ボストンの旅も2年を超えてきますと、僕はもうすっかりボストンの街に馴染んだようで、街を歩いていると観光客に道を尋ねられたりだとか、アメリカ市民権を持つ人向けの街頭アンケートに協力を求められたりだとかするようになります。つまり僕はもはや「旅人」ではなく「現地の人」として扱われるようになったのでした。旅というのは究極的には人を「旅人」のままにはしておかず、「その土地の住民」へと変えます。旅人はその土地のルールと慣習の中で自

由自在に生き、自分なりの快適な生活をそこで作り上げ、営むようになります。

信仰の旅においても、僕たちはいつまでも旅人であるわけにはいきません。最終的にはこの「信仰」という街の住民にならなくてはなりません。とはいえ、僕もかれこれ20年以上の信仰生活を送っていますが、まだまだ完全にこの域に達したとは言えません。そんな歩みの遅い僕が日々、折に触れて生活や考え方の指針として読むのが、ブレイズ・パスカルの『パンセ』（中公文庫）です。パスカルは若くして亡くなりましたが実はもう僕の方が年上なのですけれど、信仰生活の先輩として実に様々なことを教えてくれます。「こんなに自由でいいのか」というほど自由に、「なんてスマートなんだ」と感嘆するほどスマートに、ときに「こんなに赤裸々に愚痴を吐くのか」と呆れるほど赤裸々に、しかも「え、ここでこ



『信仰の旅路——たましいの故郷への道』

アリスター・E・マクグラス：著
稲垣久和、広田貴子：訳
いのちのことば社
2003年刊
B6判 203頁
1,540円

「パリ症候群」という言葉があります。パリという「花の都」への憧ればかりがふくらんで、実際にパリで暮らしてみ

んなこと言う!」と吹き出してしまっようなユーモアも交えつつ、キリスト教の信仰そのものや信仰生活をまるで写真のように切り抜き、「生きた信仰」というよりも、「あるがままの信仰生活」を見せてくれます。



改訂新版『自由への指針——今を生きるキリスト者の倫理と十戒』

大嶋重徳：著
教文館
2023年刊
四六判 216頁
2,420円

ら、イメージしていた憧れと現実との乖離がつかかりして落ち込んでしまうという現象のことです。時として信仰生活にもこれは起こります。「こんなはずじゃなかった」と思わされることが、信仰生活には多々あるものです。でもだからこそ、その旅には意味があります。旅というのは空想や理想ではないんです。自分の足で歩かねばならず、歩く以上は土体が汚れ、自分の手で食べねばならず、



『パンセ』
パスカル：著
前田陽一、由木康：訳
中央公論新社
2018年刊
文庫判 743頁
1,540円

食べる以上はトイレもしなければならぬ、そういう現実を経験することこそ旅なんです。信仰の「パリ症候群」を防ぐために、今回紹介させていただいた3冊が、皆さんの助けになれば幸いです。それではまたいずれ。MAROでした。

聖書学者が孫（と私たち）に 送る聖書物語

〈評者〉
中村佐知



わたしの聖書物語
神さまの大きいなる計画

N・T・ライト 著

標 珠実訳

島先克臣監修



N・T・ライトと言えば、専門性の高い学術書から一般読者向けの書籍まで、幅広い読者層に向けた多数の著作を持つ新約聖書学者です。まさか彼が子ども向けの聖書物語まで書くとは思わなかったという方も多いのではないのでしょうか。私も最初は意外に感じましたが、前書きを読んだと納得しました。彼が子ども向けの聖書を書くと思ったのは、長年にわたる聖書の研究を通じて最も重要だと考えるようになったことを、孫たちに伝えたいと思ったからだと思います。従来の子どもの向け聖書物語は、旧約と新約の一部を断片的に抜き出したものがほとんどで、ライト曰く「キリスト教版インソップ物語」となっており、聖書全体が語る壮大な物語を伝えるようなものは少なかつたためです。本書は、旧約聖書と新約聖書から七〇話ずつ、合計一四〇話を収録しています。子ども向け聖書物語でこれほど多

くの話をバランスよく収録しているものは、私はほかに見たことがありません。特に新約聖書の物語は、福音書からだけではなく、「使徒言行録」、書簡、そして「ヨハネの黙示録」に至るまで、まんべんなく取り上げられています。

それぞれのストーリーには、複雑な神学的テーマがわかりやすい言葉で凝縮されており、色鮮やかなイラストと共に見開き一ページで魅力的にまとめられています。大人が読んでも、「この話のポイントはこういうことだったのか!」と、ハッとさせられるかもしれません。該当する聖書本文の箇所も記されており、関心のある読者は、聖書そのものも参照できるようになっています。そして、ここが本書のいちばんの特徴だと思いますが、一四〇の物語がただ順番に並んでいるだけではありません。それぞれの話に「この物語と関係があるよ。こちらも読んでみよう!」と、関連

再び奇跡は起きる

奇跡の裏側

あるスイス人伝道者の人生

ジョン＝リユック・トラクセル [著]
福岡みちる [訳]



教派を超えた一致と宣教の働きを 30 年以上続ける著者が、ラインハルト・ボンケの強い勧めで著した半生の証し。数々の危機を乗り越え、精神の病さえも乗り越えて不死鳥のごとく立ち上がり続ける一信仰者のひたむきな姿が胸に迫る。

四六判・並製・260頁、定価1,650円(税込)

キリスト新聞社 since 1946

〒112-0014 東京都文京区関口1-44-4 3F
03-5579-2432 support@kirishin.com

する物語が記されており、旧約聖書と新約聖書が互いにごのようにつながっているのか、どのように神の壮大な物語を紡いでいるのかを、概観できるようになっているのです。この聖書物語を読んで育つ子どもは、聖書全体の大きな流れと主要な出来事を包括的に理解し、被造世界の救済という神の愛に満ちたご計画がいかに一貫しているかを、自然と学ぶことでしよう。本書は小学校高学年から中学生向けですが、高校生以上の青年や大人であっても、十分に読み応えがあると思います。物語と物語のつながりに目を向け、その背後にある神のおこころに思いを馳せることで、多くの発見や洞察を得ることができるとでしょう。

さて、一四〇話の最後を飾る話は何だと思えますか？「ヨハネの黙示録」の新天地の話だと思いませんか？

んが、そうではありません。イエス様です。これはネタバレになるので小声で言いますが、本書の最後に登場するその物語に「関連する物語」は、「創世記」に戻るのです。神が人間に役割を与えた場面です。なんとという構成でしょうか！聖書の物語がただの文字によるストーリーではなく、この世界で神と共に働くようにという、神から私たちへの招きになっているのです。これほどまでにイエスとこの地に対する神のご計画を中心に据えた「聖書物語」を、私は見たことがありません。そして、その壮大な神の物語には、私たちも登場人物として招かれているのです。

(なかむら・さち || 霊的同伴者、翻訳家)

(天地二六五mm×左右二二五mm・二九六頁・定価三九六〇円・日本聖書協会)

誰もが この小さな本の一部だ

〈評者〉**志村 真**

「平和をつくる者とならずにキリスト者でいることなど、誰にもできない。私たちは平和をつくる生へと呼ばれている」。

ヘンリ・ナウエンは本書において「平和をつくる人々のための霊性をうち立てようと試み」ています。イエスの時代以降、「祈りと抵抗と共同体は、キリスト者の生にとって欠くことのできない要素」となりました。そこで彼は、「祈り」「抵抗」「共同体」と三つの章を立てて述べていきます。その際、ナウエンは聖書に聞きながら書き進めたのだと思います。参照を含む聖書の引用は、八七回に及びます。その中で複数回引用されている聖句が五つあります。そのうちの最初は、本書の言わば主題聖句である「平和を造る人々は幸いである」（マタイ5・9）です。

それでは、残る四つをたどりながら見てまいりましょう。



平和の種をまく

祈り、抵抗、共同体

ヘンリ・ナウエン 著

渡辺順子 訳

徳田 信解説



「悪魔が、ほえたける獅子のように、誰かを食い尽くそうと歩き回っています」（一ペトロ5・8）が三回引用されています。これはナウエンの時代認識と関わっています。序文を記したジョン・ディア神父によれば、本書は「一九八〇年代前半、高まる冷戦の緊張のさなかで、教会と平和運動のために」書かれました。米ソが大量の核兵器をもって対立していた時代です。また、「ヒロシマ」「トライデント潜水艦」が何度も出てきます。「核によるホロコースト」の象徴です。核兵器保有国が九ヶ国となり、複数の国が核の使用に言及して世界を脅す今日、私たちはナウエンと厳しい時代認識を共有せざるを得ません。

次に、ナウエンは「いつも目を覚まして祈っているさ」（ルカ21・36）を二回引いて、「平和をつくる人は祈る」と言い、「祈りそのものが平和をつくる働きである」

とまで語ります。

その上で、キリスト者は「戦争と破壊のあらゆる力に断じて抵抗しなければならない」とナウエンは訴えます。そして、「キリスト者の抵抗は非暴力である」と明言します。彼は「お願いすれば、父は十二軍団以上の天使を今すぐ送ってくださるであろう」(マタイ26・53)を二回引いて、キリストご自身が暴力抵抗を退け、非暴力であったことを示します。ですから、「キリスト者は非暴力である」のです。

平和を求めて祈り、抵抗する中で苦しみに直面するとき、キリスト者はくじけることはありません。なぜなら、キリストと共に神の家に住んでいるからです。キリストはこう励まします。「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。私はすでに世に勝っている」(ヨハネ

16・33、三回引用)。

ナウエンは続けます。「この世界で生き続けるためにどうすればよいだろうか。その答えはとてもシンプルだ——共に生きるのだ。平和をつくる働きが単独ではなく共同体によって担われるとき、「抵抗の共同体は耐えぬことができ」ます。「平和をつくるための働きは、私たちが共に生きて取り組むときだけ持続可能になる」のです。

この良書の翻訳権を取得し出版してくださった日本キリスト教団出版局と編集者、訳者と解説者のエキユメニカルな取り組みに、心より「すばらしい！」と申し上げます。(しむら・まこと)日本基督教団 飯塚教会・直方教会牧師、田川

教会代務者

(四六判・一九二頁・定価二四二〇円・日本キリスト教団出版局)

皆川達夫
セレクション

音楽も人を救う ことができる

皆川達夫
樋口隆一 編



戦後日本に西洋音楽の魅力を広め、合唱指導者としても活躍した皆川達夫。彼が遺した書籍未収録のエッセイ、講演録、鼎談等を通して、幅広い業績とその人柄を偲ぶ。
A5判並製・256頁・定価3960円

使徒言行録を読もう

川崎公平



初代教会の歩みを記した使徒言行録。一見難しそうなこの書を、「新約聖書の中で、使徒言行録ほど面白い文書はないかもしれません」と語る説教者が、いきいきとわかりやすく説き明かす。
四六判並製・224頁・定価2750円

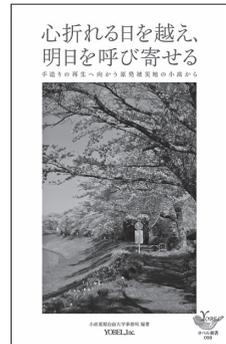
日本キリスト教団出版局

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457
E-mail eiyou@bp.uccj.or.jp (価格10%税込)

<https://bp-uccj.jp>

小高夏期自由大学の報告 ——再生への道を求め

〈評者〉 荒川朋子



心折れる日を越え、
明日を呼び寄せる

手造りの再生へ向かう
原発被災地の小高から

小高夏期自由大学事務局編著



「小高（おだか）」とは、2011年の東日本大震災による地震と津波の被害を受け、さらに原発事故の影響で全住民に避難指示が出され5年間無人となった福島県南相馬市

小高区のことである。この本は、昨年9月に3日間に亘つ

てその小高で開催され、延べ145名が参加した小高夏期自由大学の記録だ。その趣旨は「小高復興の現在地を知り、

脱原発と平和への道筋を描きつつ、内外との交流を深める」ことだ。3部構成から成ったプログラムの第1部、第

2部は、計7名の小高に関わりを持つパネラーたちがそれぞれ「あの日」（3月11日）と、「あの日」から12年間の

長い道のりを、そこに生き、そこに足跡を刻んできた者でしか語れない言葉で語った。特に第2部では、Uターンや

移住によって小高の再生を新しい試みで作っていかうとする若い世代の言葉から、彼ら、彼女らのしなやかさや、マ

イナスから何かを生み出す創造力、感性、そして実行力に希望を感じた。

第3部は、福島県出身の高橋哲哉東京大学名誉教授による講演の記録で、「犠牲のシステム」の中にある福島の実態と、世界から見えた「フクシマ」を踏まえた上で、「脱原発と平和への道筋」をどう描くべきかの問いが突き付けられている。また高橋氏は、放射線が「人々の自身の生の根底を成してきた（倫理）を破壊した」ことで福島の人々が負った「倫理的な傷」について言及し、福島の問題が「科学」や「事実」だけで終わらせることのできない位相を持つことを説明した。福島の問題の特殊性と複雑性を理解する上で重要な指摘だと感じた。

なぜ小高夏期自由大学が145名もの人を集めたのか。それは、その開催の約1年前から定期的に行われていた住

民の交流の場の「総集約としての意味」を持つからであったと思うが、同時に私は、理解しがたい数々の現実を前に、簡単には言葉にできない思いと、それでもそれでしか伝えられないからこそ絞り出され、語られる真実の言葉がそこにあったからだと思う。「内外」から集まった人々が参加し、自由に交流することによって、そこにその時点でのそれぞれの「受け止め」が生まれ、その「受け止め」はまた別の人の「受け止め」と出会い、響き合って、そこから新しいものが生まれたり、力を得たりして、様々な（多くはポジティブな）相互作用が起きる予感を多くの人が持ったからだと思う。それは3日目の分科会で上がった様々な声を最終的に8つの提言にまとめ上げ、行政に提出したというモーメンタムからもうかがえる。（筆者は今年9月に行

われた第2回小高夏期自由大学でもその空気を感じてきたところだ。）

小高夏期自由大学の開催は、現地事務局としてその場を留意したひとりの牧師の存在なしには語れない。「あの日」以来、小高に隣接する浪江では、草に覆われてドアを閉ざしていた日本基督教団浪江伝道所に、東京からひとり足を踏み入れ、一昨年4月から礼拝を再開し、また小高では、すでに開いていた教会の扉を開け続けている飯島信牧師の、浪江の、そして小高の人々の生活を見守る優しいまなざしと、全ての「声」を尊重する深い思いに、心から敬服いたします。

（あらかわ・ともこリアジア学院校長
 〈新書判・二四〇頁・定価一四三〇円・ヨベル〉



新刊



宗教と終末論

上智大学
 キリスト教文化研究所
 川中 仁 編
 ●四六判並製 215頁
 定価 2,200円

本書は、2023年の聖書週間の上智大学にて行われた聖書講座をもとに、書き下ろした論文を収録した。

神の国はあなたがたの〈内面に〉
 —ルカ福音書17章21節のἐντόςと
 禿鷹の言葉(ルカ17:37)

大貫 隆

●
 破局のなかの希望

—よみがえる終末論

福嶋 揚

●
 創造と終末

—創造物語解釈の伝統と
 ヨハネの黙示録の終末論

遠藤勝信

ISBN978-4-86376-102-5

LITHON [リトン]

〒101-0061 千代田区神田三崎町2-9-5-402
 ☎03-3238-7678 FAX03-3238-7638

誰でも取り組める 多様な事例が満載

〈評者〉 吉澤慎也



若者と生きる教会・
若者に届く説教

大嶋重徳著



教会から若者がいなくなつたと言われて久しい。次世代を担う若者たちの育成と伝道は、日本の教会全体の喫緊の課題だ。今や誰もが、どうすれば若者が教会に集まるだろうかと真剣に悩み、教会の行く末を案じている。本書には、その打開策となり得るヒントが随所に散りばめられている。次世代育成・若者伝道のために祈り取り組んでいるすべての信徒・教職者に、本書を心から推薦する。

著者と私は、同じ学生宣教団体で長年ともに仕えてきた、いわば戦友である。正直に告白すると、私も同様のテーマで講演する機会がしばしばあるが、その際には「ぜひ、この本を読んで実践してください」と勧めるつもりでいる。私が何を話しても「それ、あの本に書いてありましたね」と言われてしまいそうなほどに、本書はこの分野における課題と可能性を幅広く網羅し、適切な言葉で言い得ている。

そのインパクトを生み出しているのは、著者自身のありのままをさらけ出す姿勢だ。批判や恥を恐れずに惜しげなく手の内をさらすその潔さに、私は同労者としていつも感服させられてきた。

本書は、著者がキリスト者学生会主事であったときに出版した『若者と生きる教会——伝道・教会教育・信仰継承』（教文館、二〇一五年）と『若者に届く説教——礼拝・CS・ユースキャンプ』（教文館、二〇一九年）を合本にし、それに書き下ろし原稿「若者と生きる教会、それから……」を加えたものだ。合本部分を改めて読み返したが、色褪せるどころか、ますます「そうだったよな」と教えられることしきりだ。若者世代の変化は早い。一読したことのある方にとっても、新たな気付きや発見がきつとあることだろう。加筆部分については、近年のコロナ禍対応

知られざる地方伝道史の 克明な記録

〈評者〉 山口陽一



岐阜キリスト教史

日本伝道覚書

水垣 清著

金城学院大学キリスト教文化
研究所監修



本書は、日本キリスト改革派中津川教会で戦中戦後の三十八年間に牧師として生きた水垣清（一九〇六一―八八年）が、伝道雑誌『つのおえ』の第三四三―四二九号（一九七八年十月―一九八五年十二月）に八十七回にわたって連載した「岐阜県」「キリスト教史覚書」を、金城学院大学キリスト教文化研究所が監修してまとめたものである。キリスト教文化研究から戦後まで、岐阜県のキリスト教史を教派を超えて辿る通史であり、日本全国を見渡しても、福島恒雄『北海道キリスト教史』（一九八二年）、石川政秀『沖繩キリスト教史』（一九九四年）を除けば類例がない。

第一章「美濃のキリシタン」においては、L・フロイスの岐阜城訪問など周知のことは簡潔に記し、岐阜県に関わるキリシタン関連の人物を網羅して紹介し、特徴である可児郡塩村・帷子村などの潜伏キリシタン弾圧の痕跡に焦点

をあてている。飛騨国大野郡の明和八（一七七一）年の南蛮誓詞など一次史料の発見に基づく記述は、著者の探求の深さを示している。日本誓詞には地方色があり、「殊に弥陀釈迦二尊を初め祖師の本願に洩れ」は、浄土真宗の地盤ならではと思われた。

第二章「明治のキリスト者」では中央で活躍した千村五郎、戸田欽堂、南小柿洲吾が出身地の視点で紹介され新鮮である。『天道遡源解』を著したのは千村五郎であるというのは新事実と思われるので典拠が知りたかった。第三章「岐阜県伝道のさきがけ」では、中津川教会の初代西森拙三牧師の、平田国学から自由民権を経てキリスト教へという思想の流れに注目して高く評価し、海津郡の佐久間国三郎のキリスト教講義所を紹介する。佐久間家の長男がカネボウの武藤山治であり、武藤の信仰のルーツを知ることが

できた。

第四―六章では、岐阜を中心に西濃・中濃、多治見から恵那までの東濃と地域ごとの伝道が、南長老ミッション・日本基督教会を中心に、聖公会、メソヂスト、ホーリネスを網羅して語られ、飛騨では日本同盟基督協会の伝道が生きたと記される。第七章「大正・昭和初期の伝道と教会」では大垣の美濃ミッションの神社参拝拒否が大きく取り上げられる。

圧巻は、第八―十章の「日本基督教団の成立」「教会の戦時体制」「戦後のキリスト教会」である。一九四一年に中津川教会に赴任した水垣清牧師には、最初から特高刑事がついていた。宗教団体法に基づく教会合同と部制廃止に対して日本基督教会浪速中会から起こされた教会論的な反対論、聖公会中部教区内教会の非加入の動きなどが克明に記されている。ホーリネス系教会への弾圧と解散の後、信徒たちを支援する水垣牧師の活動、敗戦前後の岐阜の諸教会の被災状況を伝える浅倉重雄前岐阜支教区長の著者宛書簡など、貴重な資料を用いた細やかな記録は、力を合わせて信徒たちを守ろうとした得難い記録である。そして戦後、占領下の教会再建が当事者目線で記され、特に日本基督改革派教会の教会を聖書的に再建しようとする教師たちの見

識には敬服させられた。

付録として「南長老教会の三M」^{スリーエム}J・A・マカルピン夫妻、W・A・マキルエン、L・W・モーア（これは石井正治郎による）の略伝がある。

各県ごとのキリスト教史には特徴があり、これを日本キリスト教史の記述に反映させることは課題である。群馬や岡山は日本組合教会、山梨・長野はカナダメソヂスト、茨城はキリストの教会を抜きに語ることができない。『日本キリスト教歴史大事典』（一九八八年）の各県の項目はそのための基礎作業であったが、本書が各県キリスト教史研究の呼び水となることを願ってやまない。

（やまぐち・よういち 東京基督教大学特任教授）
（A5判・三四〇頁・定価四二九〇円・教文館）

競争社会を超えて 神の家を築く道

〈評者〉 徳田 信



イエスさまに
ついていこう

ヘンリー・ナウエン 著
リチャード・ロール 序
ブラウネルのぞみ訳



本書は1985年の講演がもとになっています。著者ナウエンは、親密な交わりや「下に向かう生き方」を説く霊性指導者として知られており、自分自身の「生の座」に長らく

違和感を覚えていました。彼が座していたのはハーバード大学教授の椅子。人より抜きん出ることが良しとされる競争社会でした。ナウエンは講演の後、間もなく、ハーバードを去ってトロント郊外のラルシュ・デイブレイクに移ります。ラルシュは健常者と障がい者が共に生きるコミュニティで、ナウエンはその司牧者兼介助者となりました。

ナウエンはこの講演を準備する中で、働き場がどこであるか、神からの召命が何であるかを感じていきます。召命を確かめるこのプロセスこそ、原著タイトルの“Following Jesus”つまりイエスに従うことです。それは一見、重い足取りで進むような厳しい道に思われます。し

かし本書では、邦訳タイトル「イエスさまについていこう」が示すとおり、自分から歩みたくなる軽やかな道として提示されています。

ナウエンによると、イエスに従うことはまず、たとえ敵意や競争に満ちた社会に生きていたとしても、そのただ中で安らぎを見出すことです。それは「いま、ここで」経験できる神の国、神の家だと言われます。イエスの呼びかけに応えることが、焦点が定まった目的ある人生への道であると述べます。この場合の目的ある人生は、神と人との愛に生きること、それも具体的なアクションを伴う愛に生きることです。なぜなら、神の息吹（聖霊）を注がれる私たち自身も神の家になり、さらには、私たちを通して神の家が次々と周りに建てられていくと理解されるからです。

かつて「あしあと」という詩が広く紹介されました。人

生のどん底でイエスに背負われていたことに気づいたという内容です。そのような、いわば受け身の救いが必要なきも確かにあります。ですがナウエンは、イエスに背負ってもらっただけでなく、私たちが自分の足でしっかりと歩くことが必要だと語ります。それは必ずしも力強く大きな歩みである必要はありません。イエスの愛のささやきに応え、小さくとも一歩を踏み出します。そうすれば、具体的にどのような場で愛を実践するかは自ずと明らかになっていきます。こうしてナウエン自身もラルシユへと導かれました。

ただしナウエンは、深く人間関係を築こうとするとき、自分自身の傷に向き合う場合があることを自覚しています。ナウエン自身、家賃を超える電話代を使うことがあるほど愛に飢えていました。また、私たちが経験する愛は「ギブ&テイク」がぬぐえません。互いにより多くを相手に求めようとして、それが満たされないために相手への不平を募らせます。だからこそナウエンは、自分に言い聞かせるように、神の愛に根差すことが必要だと繰り返し訴えるのです。

そして、愛への根差しが深まれば深まるほど、神の愛と無関係な人は誰もいないことに気づくのだと語ります。「神の愛があまりにも豊かで広いので、それを見えるよう

にするためには多くの人びとが要るのです。そのたくさん愛の形が互いを支え合うのです」(55―56頁)。ここには宗教の垣根を超えた共同体性が示されています。それはいわゆる宗教多元主義ではなく、イエスが示す神の愛にすべてが包み込まれることを確信する包括主義です。

福音はそれにふさわしい語り口を求めます。キリスト教の世界では、しばしば外の世界以上に激しい対立が見られます。それぞれ真剣に物事に取り組んでいるのであり、意見の相違自体が悪いものではありません。しかし問われるのは語る内容と語り口との一致です。ナウエンが伝えるのは、小さく密やかな愛こそが「イエスさまについていこう」とする思いを喚起します。強制によって愛は伝えられません。

ナウエンはカトリック神父でありながら他派にも多くの読者を得てきました。彼の文章が人々の心に届くのは、私たちが多かれ少なかれ経験している葛藤に自分事として取り組んでいるから、またそのことが文章に滲み出ているからだと思われれます。そのことは本訳書にも言えます。ナウエンの息遣いを感じさせ、訳者自身がナウエンの世界を深く味わっていることが伝わる訳文です。

(とくだ・まこと＝フェリス女学院大学准教授

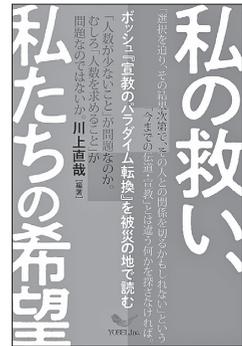
(四六判・一七〇頁・定価二二〇〇円・一麦出版社)

新しいパラダイムの誕生

〈評者〉片柳弘史

東日本大震災の被災地、石巻で、被災地支援に取り組みながら、デイヴィッド・ボツシユ著『宣教のパラダイム転換』（東京ミツシヨン研究所刊）の読書会を行っている川上直哉氏が、キリスト教放送局日本F E B Cの統括ディレクター補佐、長倉崇宣氏と日本F E B Cの番組の中で行った話題の対談が一冊の本になった。ボツシユの提唱した枠組みに基づいて、現代の「宣教のパラダイム」そのものを問い直しつつ、東北被災地支援の現場で今まさに生まれつつある新しい「宣教のパラダイム」を紹介する、画期的な内容となっている。日々の宣教活動の中で行き詰まりを感じつつ、なぜ宣教が行き詰ってしまったのかわからずに悩んでいる教職者、信徒にとって、かつてないほど大きな刺激となるに違いない。

現代日本における宣教は、「啓蒙主義（民主主義）」の影



私の救い、私たちの希望

ボツシユ『宣教のパラダイム転換』を被災の地で読む

川上直哉著



響によって信徒の数を増やすことを重視し、また「帝国主義と植民地主義」の影響によって自分たちの考え方を人々に押し付けようとする傾向があるのではないかと川上氏は指摘する。何より大切なのは「自分自身の救い」であるにもかかわらず、他にもたくさんの人が信じていないと落ち着かない。相手の苦しみに共感しないまま、自分たちのやり方、考え方を押しつけようとする。そのような態度に対して、川上氏は、自分自身が体験した救いの実感に基づいて、自分の言葉で力強く語ることに。人々の苦しみに共感しつつ、「地域に奉仕するために、教会にしかできないことに、ひたすら専念する」「教会の持続性を得るために、教会にもできることは、なんでもする」ことを提案する。信じている人の数に左右されない本物の福音に立ち返る、「教会に人々を集めるためにどうしたらいいか」という教

会中心の考え方から、「教会は人々のために何が出来るか」という民衆中心の考え方に転換するということだ。

『聖書』を偶像にしてはいけない。聖書を自分の言葉で語り直し、活き活きと聴き合う中で、神の言葉を聴きとらなければならぬ」とも川上氏は語る。生きている神は、それぞれの人間が置かれた場所で聖書の言葉を通してわたしたちに語りかけるのであり、その語りかけを聴きとったわたしたちが、それぞれに自分の聴いた言葉で活き活きと福音を語るときにのみ宣教の言葉は力を持つというのだ。

「救い」についての考察も興味深い。救いは「本来『救われた』という完了形で語られるものではなくて、神さまと一緒にいるから、一瞬一瞬『救われて行く』ものだ」と川上氏は語る。キリストの愛に包まれ、キリストの愛を生

きているときにのみ、わたしたちは「救われている」ということだ。この考え方によれば、相手を見下しながら、「わたしは救われた。まだ救われていないあなたたちは気の毒だ」という態度をとるとき、わたしたちは救われていないということになるだろう。

この本が提示する新しい視座の中から幾つかを紹介したが、これはほんの一部に過ぎない。全体を読んでわたしが感じたのは、東北にせよ、わたしがいる山口にせよ、宣教の最前線と呼べる場所で働いていると、同じような結論に到達するらしいということだ。新しいものは辺境から、宣教の最前線から生まれるということを信じたい。

(かたやなぎ・ひろし)イエズス会司祭
(四六判・二六四頁・定価一九八〇円・ヨベル)

ヨベルの新刊案内



違いがあいつつ、鈴木道也著 ひととつ 試論「十全のイエス・キリスト」へ

日本基督教団花巻教会牧師

四六判・四五六頁・三〇八〇円
ひつじに縁合われ、初めて見えてくる聖書の原風景！
大貫隆先生推奨！…論述が平静かつ公平。先行研究からの引用は常に正確かつ肯定的で、自説の中へ統合する姿勢。無益に論争的なきところがなく建設的。文体は一般読者向けで分かりやすい。図は明快で読者の理解を大いに助ける。



長田栄一 聖なる民 宝の民 —— 出エジプト記と申命記講解

話題！

四六判・二八八頁・一九八〇円
旅するように聖書を辿れば、麗しい景色も見えてこよう。私たちは良きものとして創られ、聖なるものとして招き入れられている。人間はいかなる存在なのか、荒野を旅したイスラエル民族の信仰の視点から懇切丁寧に解き明かし、心の水位を高めてくれる連続講解。解説。

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-1-5F
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858
出版の手引き / 呈 (税込)

読者の心に 〈霊性を呼び起こす〉物語集

〈評者〉
佐藤貴史



キリスト教思想史の
例話集 I
物語集
金子晴勇著



キリスト教思想史はおもしろい、でも難しい——このように思う人こそ、ぜひ手に取ってほしい著作である。本書

は、著者が長年の大学講義で実践してきた方法に基づいて構想されている。難解な概念や思想をいかにして学生が理解できるように伝えるか。教壇に立つ者はつねにこの問いを意識していると思うが、著者は歴史のなかに埋もれた「思想的な宝」（三頁）からとくに「物語」を取り出し、学生に向かって「例えば」と語りかけながら対話を開始する。「例話」としての物語は単にわかりやすいだけではなく、「倫理的・教育的効果」（七頁）も備えているという。

本書が扱う物語はキリスト教に限定されていない。古代ギリシアからルネサンス、近代文学から現代思想にいたる歴史から多くの物語が選ばれ、著者の簡潔な解説が添えられている。しかし、本書の主役は解説ではなく、あくまで

物語である。著者は、「訓話・講義・説教など」（四頁）の準備において本書が役立つことを願う。

本書はたくさんのお話で賑わっているが、ここでは二つだけ紹介しよう。「キリスト教古代の物語」では有名な「アウグスティヌスの回心物語」が扱われている。三八年の暮れ、アウグスティヌスは健康状態がよくないなか、教授職、世俗的職業への野心、そして結婚への意志を放棄することを考えていた。そのような苦悩に直面する彼に回心の瞬間が訪れる。「魂のかくれた奥底から、自分のうちにあったすべての悲愴がひきずりだされ、心の目の前につきみあげられたとき、恐ろしい嵐がまきおこり、はげしい涙のわか雨をもよおしてきました」（一六八頁）。著者は、ここにアウグスティヌスの「心」のドラマの始まりを見る。魂のうちに隠されていた悲愴が「心の目の前に」つきみあげ

られたとき、「神の言葉聞いて信じる」(二六九頁)アウグスティヌスの「靈性」がこの物語の前景に現れた。そのとき、「とれ、よめ」の声が聞こえ、彼は聖書を開く。アウグスティヌスの周りにあった「疑惑の闇」はすっかり消えていったのであった。

「近代思想とキリスト教」では、ドイツ敬虔主義の物語として、ゲーテの著作に収められている「ツインツェンドルフ伯爵のヘルンフト派に入信した女性の信仰の記録」(二五〇頁)が紹介されている。「わたしの魂は、ある引力(Ein Zug)によって、イエスがかつて最期をお遂げになった十字架の方へ導かれました」(二五〇頁)。この女性は「わたしたちの心がそこにいない恋人にひかれるような」力を受け取ったのであり、著者はそこに「感性や理性を超えた心の深み」にある「靈性」を感じる。

本書は、「思想史的な宝」が詰まった物語集である。とはいえ、著者はやみくもに物語を選んで詰め込んでいるわけではない。本書は、著者の長年の研究そして講義を踏まえて叙述された〈靈性〉の思想史であり、読者の心に〈靈性〉を呼び起こす物語集である。この意味において、例話としての物語がもつ「倫理的・教育的効果」や「訓話・講義・説教など」において役立つようにという著者の願いは本書のなかで一貫している。

「キリスト教思想史は物語の連続である」(三三三頁)。そうであれば、キリスト教思想史はおもしろいに決まっている。「思想史的な宝」を探すつもりで、教会、教室、もしかししたら寝室で本書を開いてほしい。

(さとう・たかし) 北海学園大学人文学部教授
(新書判・三四四頁・定価一五四〇円・ヨベル)



福音主義教会法 と 長老制度

深谷松男
FUKAYA Matsuo



日本の福音主義教会の法について、初めて体系的にまとめた労作

民法学者である著者が、日本基督教団常議員、同信仰職制委員会委員として、また長老としての経験を踏まえ、具体的な事例に即し教会法を考察。

A5判・上製本
定価 3,520 [本体 3,200 + 税] 円
ISBN978-4-86325-157-1



株式会社 一麦出版社
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10
TEL (011) 578-5888
<http://www.ichibaku.co.jp>
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

既刊案内 (2024年8月～2024年9月)

編・著・訳者	書名	判型	頁	定価(税込)	版元	発行日
ヘンリー・ナウエン著 リチャード・ロール序 ブラウネルのぞみ訳	イエスさまについていこう	四六	170	2,200	一麦出版社	8/8
西谷幸介	「日本教」の弱点 —無責任性と日本人	新書	264	1,650	ヨベル	8/9
川上直哉	私の救い、私たちの希望 —ボッシュ『宣教のパラダイム転換』を被災の地で読む	四六	264	1,980	ヨベル	8/26
N. T. ライト 著 本多峰子 訳	イエスに従う —弟子として生きることへの招き	四六	202	2,310	教文館	8/21
W. J. エイブラハム 著 加納和寛、赤松真希訳	メソジスト入門 —ウェスレーから現代まで	四六	246	2,640	教文館	8/21
柏木哲夫 編	信仰生活ガイド 苦しみの意味	四六	128	1,540	日本キリスト教団出版局	8/23
皆川達夫 著 樋口隆一、宮崎晴代監修	皆川達夫セレクション ルネサンス古楽の記譜法 —白符計量記譜法入門	B5	64	3,080	日本キリスト教団出版局	8/23
エリーザベト・ルーカス著 草野智洋、徳永繁子訳	ロゴセラピー —人間への限りない畏敬に基づく心理療法	A5	290	3,300	新教出版社	8/26
N・T・ライト 著 標珠実 訳 島先克臣 監修	わたしの聖書物語 —神さまの大いなる計画	A4変	296	3,960	日本聖書協会	9/2
大嶋重徳	若者と生きる教会・若者に届く説教	四六	252	1,980	教文館	9/4
馬淵彰、平松英人編 キリスト教史学会監修	黎明期のキリスト教社会事業 —近代都市形成期における挑戦と苦悩	A5	168	3,300	教文館	9/18
小高夏期自由大学 事務局 編 著	心折れる日を越え、明日を呼び寄せる	新書	240	1,430	ヨベル	9/9
金子晴勇	キリスト教思想史の例話集I —物語集	新書	344	1,540	ヨベル	9/13
高松均	しずけき祈りのなかで —病いを授かって	四六	192	1,430	ヨベル	9/13
大森住ゆきちぎり 文絵	こどものための 神のものがたり	245 × 210	28	1,100	販売元ヨベル	9/19
住谷眞	神さまのエンドロール —住谷眞キリスト教・聖書講話集	A5	710	7,480	一麦出版社	9/17
藤原佐和子	現代エキュメニカル運動史 —ジェンダー正義の視点から読み解く	A5	238	3,740	新教出版社	9/19
高橋貞二郎、増田 監 琴修	未来への言葉 —クリスチャン・エンディングノート	B5	64	1,430	日本キリスト教団出版局	9/24
大島力	「読もう」シリーズ イザヤ書を読もう 上 —ここに私がおります	四六	208	2,640	日本キリスト教団出版局	9/25

書店名	郵便番号	住所	電話	ファックス	URL	メール	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西6丁目	011-737-1721	011-747-5979	http://www.jp-shop.com	sasaki@jp-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用		zenrikan_systen_0530@ghoo.co.jp	02350-0-874
エッセイの木	980-0012	仙台市青葉区錦町1-13-6 エマオ1F	022-223-2736	022-302-6678	https://sendaicobs.uccj.jp/	info@sendaicobs.uccj.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	千葉市中央区新館2-1 千葉カシヤセンタービル	043-238-1224	043-247-3072	http://www.keisen.christian.jp	keisen@vestia.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.kyobunkwan.co.jp	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
待長堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	共用	http://taishindo-books.jimbo.com/	taishindo@sj.com.home.ne.jp	00110-8-95827
バイブルハウス青山	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3567-1995	03-3567-4435	http://biblehouse.jp	biblehouse@bible.or.jp	00160-2-18410
東京キリスト教書店	112-0014	文京区目黒1-44-4 塚原ビル1F 日キ納(傍藤野門)	03-3260-5663	03-3260-5637		tokyo@nikkiban.co.jp	00130-3-60976
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www.brighter.jp/~yokohamads/index.html	sksch@mva.biglobe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用		00560-8-51419	
静岡聖文舎	420-0866	静岡市葵区西草深町20-26	054-260-6644	054-260-5612	http://www.s-seibun.co.jp/	info@s-seibun.co.jp	00810-8-26558
名古屋聖文舎	466-0045	岐阜市瑞穂区瑞穂16日本キリスト教団瑞穂会館	052-680-8090	052-680-8091	http://nagoya-seibunsha.la.coccan.jp/	nagoya-seibunsha@nifty.com	00810-5-14073
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒神口通河原町東入ル	075-211-6675	075-211-2834	http://web.kyoto-net.or.jp/people/kjordan/	kjordan@mbox.kyoto-net.or.jp	01010-2-594
大阪キリスト教書店	530-0013	大阪市北区茶屋町2-30	06-6377-6026	06-6377-6027	http://osekacobs.web.fc2.com/	ochrbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
堺キリスト教書店(聖徳社)	591-8044	大阪府堺市北区中長尾町2F1-18	072-254-2233	共用		sakaix@outlook.jp	00970-0-172228
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町3-9-18 三陽ビル2F	078-331-7569	078-945-9388		kobex@nikkiban.co.jp	00170-2-421390
広島聖文舎	730-0841	広島市中区舟入町12-7	082-208-0022	082-208-0177		hseibun0951@yahoo.co.jp	01360-4-1958
リバーサイドブックス	779-1105	徳島県阿南市羽ノ浦町古大道路/西13	090-8694-4986	050-3142-3017		ykwbt3@gmail.com	16220-17974891
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一万町1-23	089-921-5519	089-921-5413	http://www.geoties.jp/matsuyama_1007/mbs.html	sksch@dokidoki.ne.jp	01650-1-2120
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484	http://www.sinseikan.jp/	info@sinseikan.jp	01750-5-10932
キリスト教書店ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用		k-haleruya@bible.or.jp	00160-2-18410
沖縄キリスト教書店	904-2143	沖縄県沖縄市知花4丁目12-33	098-927-0220	098-938-1102	https://www.okinawacobs.net	info@okinawacobs.net	01790-4-152916

※一般書店関係の方は 日キ販営業部 TEL 03-3260-5670 にご連絡ください。

福音と世界

2024年12月号

特集Ⅱ待ち望む

待ちつつ急ぎつつ

寄稿者Ⅱ北

博、山口希生、大宮有博、高橋裕子、許伯基、金井創督

リレー連載「荊冠の神学」を読み直す②（青木理恵子／好評連載 女たちの闘い―北九州「聖書と女性」読書会、証言としての旧約聖書（田島卓）、「日本のキリスト教」を読む（山口陽）、新約釈義ルカ福音書（山崎ランサム和彦）、他

A5判・定価660円・〒70円

定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

新教出版社 TEL: 03-3260-6148

Email: sales@shinkyō-pb.com

2024年11月号の深井智朗氏の書評掲載について

本誌11月号に掲載された深井智朗氏の書評について、編集委員会で議論となりましたので、当欄を借りて報告させていただきます。

深井氏は、過去の著書・記事において、捏造・盗作の不正行為を行っていたことが認定され、二〇一九年、在職していた学校法人から懲戒解雇され、また同氏の著作の一部は絶版・回収扱いとなっています。また前年に受賞した吉野作造賞の授賞も取り消されました。

その後、同氏は、自らの不正行為について、謝罪と反省を公にする発言を行っておられません。

私たちは、深井氏が著述者として公にした業績を全て否定すべきだとは考えません。しかし、著述において深刻な不正行為を犯した人を、本人の明確な反省もなしに新た

予告

本のひろば

2025年1月号

本・批評と紹介

（巻頭エッセイ）阿部仲麻呂（特集）「聖書のグラウンドストーリーを楽しむなら、この三冊！」山崎ランサム和彦（書評）W・J・エイブラハム著『メソジスト入門』、袴田康裕著『改革教会の信条と展開』他

な著述に起用することは、たとえ小さな書評といえども不適切だと考えます。それは結局は、言葉に対する信頼を失わせ、言論活動の自滅につながるからです。

今回の深井氏の書評は、書評対象となった書籍の出版元が提供した原稿でしたが、本誌編集委員会の事前チェックが十分でなく、11月号発行前に深井氏の寄稿を見逃ごしてしまいました。今後は編集委員会の職責を果たすべく、チェック体制を強化し、このようなことのないように努めます。

ここに、当該書評掲載に関する私たちの考えを明らかにし、併せて読者にお詫びを申し上げる次第です。

二〇二四年一〇月

『本のひろば』編集委員会

キリスト教の 信じ方・伝え方

弁証学入門

A・E・マクグラス 著 田中従子 訳

信仰をより深く理解するために！
福音をよりふさわしい言葉で伝えるために！



苦難と悪に満ちた世界の中で、神はどこにおられるのか？ 神への信仰は合理的なのか？ 信仰と理性は一致するのか？ キリスト者は無神論者ど、どのように対話をすればよいのか？ キリスト教の真理性・妥当性を証しするために必要な弁証学の基本的な内容と思考を学ぶことができる、キリスト教神学の第一人者が贈る最良の手引き！

● A5判・並製・272頁・定価3,300円

既刊、好評発売中！

キリスト教弁証学

近藤勝彦 著

世俗化・脱宗教化した現代世界に、キリスト教の真理性を鮮明に語るのと同時に、キリスト教の自己変革を追求する試み。諸宗教との軋轢が起る現代社会に生きる私たちに、確固たる伝道的基盤を提示してくれる画期的な書。

● A5判・上製・664頁・定価6,380円

悲しみの向こう

希望の扉を開く言葉366

片柳弘史 著

プレゼントに最適！



『ころの深呼吸』やさしさを贈り物』に続くシリーズ第3弾！ Xのフォロワー数13万人超の片柳神父がこれまでの投稿から厳選。愛する人との別れ、病や死など、さまざまな悲しみを抱える人の心を照らす希望の光。

● A6判・並製・390頁・定価990円

既刊、好評発売中！

キリエ 祈りの詩

ヨッヘン・クレツパー 著 森本二郎 写真



富田恵美子・ドロテア／富田裕 写真 ナチの迫害の下、愛する妻と娘と共に自死へと追い込まれた詩人が放つ静謐な祈りの世界。神の創造の神秘を写す写真と、十字架を見つめ、神にすべてを委ねた詩人の祈りとが響き合う。

● 四六変形判・上製・64頁・定価1,320円

天国なんてどこにもないよ

それでもキリストと生きる

関野和寛 著

目の前に広がる絶望に満ちた現実世界。理不尽に苦しむ人々に自分は何ができるのか？ 矛盾だらけの聖書に食らいつき、絞り出した魂の叫びそのままに語る。異色の牧師、初の説教集！

● 四六変形判・並製・216頁・定価1,650円



善き力

ボンヘツファーを描き出す12章

イルゼ・テート著／岡野彩子訳

ボンヘツファーのテキストに誰より通暁する碩学が語った、12の視点からの刺激的論考。彼の信仰と神学の世界がより近くなる。

没後80年記念

◆四六判・定価3960円



聖書学と信仰者

信仰者は批判的聖書学とどう向き合うべきか

M・ブレットラー、D・ハリントン、P・エンス著／魯恩碩訳

ユダヤ教、カトリック、プロテスタントの3人の著名な聖書学者が、相互の立場と方法を論じた白熱討論！

◆A5判・定価2970円

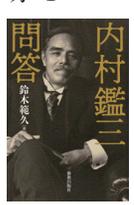


内村鑑三問答

鈴木範久著

70年にわたり内村研究を主導してきた著者が、「なぜ最初の結婚は破綻したのか」「天皇をどうみたか」など、更なる解明を要する24の「謎」を取り上げ、その人格と思想に迫る。

◆四六判・定価2970円



ロゴセラピー

人間への限らない畏敬に基づく心理療法

エリーザベト・ルーカス著／草野智洋・徳永繁子訳

「生きる意味」の発見を支えることによって心の病の治癒に取り組む。その基礎概念から実践技法まで、懇切に解説。牧会者必読！

A5判・定価3300円



ロゴセラピーと物語

勝田茅生著 フランクルが教える〈意味の人間学〉

【著者はNHK「こころの時代」講師】昔話や寓話を例にとり、ロゴセラピーの核心メッセージを平易に解説する。3刷

小B6判・定価1760円



大反響

2025年

渡邊禎雄版画カレンダー 発売中

プレゼントにも最適！

聖家族のエジプト逃避を描いた1970年の傑作。紛争と難民の絶えない世界に平和を祈って、この絵を選びました。

* 100枚から教会・学校・会社等の名入れを承ります。

◆定価660円



本のひろば.com

